

談話における出来事の生起と 意外性をいかに表すか

—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較

小口悠紀子

◆要旨

本 研究では、時間軸に沿った語りにおけるある特定の場面において、中級レベルの日本語学習者がどのように新しい出来事や意外性を表現しているのかを探るため、母語話者との比較を行った。その結果、ある場面を第三者の視点から描写する場合、中級学習者が使用する接続表現、標識「が」、副詞の種類が母語話者と大きく異なることが分かった。また標識「が」や登場人物の状態を表す表現の使用には母語による違いが見られた。本稿の結果から、中級以上の学習者にとって、形式の知識はあるが運用に結びつかない表現に関して、ある程度の長さや具体的な場面の中で再度提示することにより、語りの表現支援につなげていく重要性を指摘する。

◆キーワード

語り、ナラティブ、I-JAS、中級学習者、
評価を表す表現

◆ABSTRACT

The purpose of this study is to analyze which expressions do intermediate learners of Japanese use to describe unexpected events on their speaking story telling tasks of the I-JAS corpus.

Through my research, I found there were three different features of using expressions: 1) Conjunctions, 2) Subject Marker *-ga*, 3) Adverb between native speakers and learners. Furthermore, I also found learner's variability in the use of expressions to show surprising and subject marker *-ga* between English learners of Japanese and other learners.

Thus, from the perspective of Japanese language education, Japanese teachers should provide an opportunity to use those expressions that attach importance to context in discourse of a sufficient length and help learners to produce narrative stories vividly.

◆KEY WORDS

Narrative, I-JAS, Intermediate learners, The expression of evaluation

How Intermediate Learners of Japanese
Describe an Unexpected Event on
Their Oral Story Telling Tasks
A comparison with Japanese native speakers
YUKIKO KOGUCHI

1 問題の所在と本研究の目的

私たちは日常生活において、自身の体験や見たり聞いたりしたことを時間軸に沿って語る機会が頻繁にある。例えば国内で生活する日本語学習者にとって面白かった話、悲しかった話、偶然目撃して驚いた話、友人から聞いた奇妙な話など、日常の出来事を描写し日本語で雑談する機会は非常に身近なものであろう。また、留学生活の中で起こり得る一例として「先生と誤解が生じてレポートを受け取ってもらえなかったがどうすればよいか」というような相談から、「いつどこで最初の誤解が生じたのか、どこでその誤解が助長されたのか」というような事情説明、「なぜそのような誤解を招くような事態が起こってしまったのか」というような誤解の弁明など、良好な人間関係の構築や修復にかかわる場面においても、過去に起こった出来事を他者に語るが必要となる。

しかし、現状の日本語教育現場で扱われる教材は、基本的に対話を前提として構成されており、学習者が実際に経験したり、見たり聞いたりした出来事を時系列に沿って語るための練習をする機会はほとんどない。その影響か、学習者の発話は会話のやりとりなど短い応答は流暢であっても、自分の考えや出来事をまとめて話す際には不明瞭で分かりにくいことが指摘されている(渡邊 1996)。それだけでなく、実際に学習者の語りを聞いていると、淡々と出来事が展開し、話の盛り上がりや驚き、笑いの個所が分からなかったり、発話意図などが読み取りにくかったりする問題も感じる。

では、学習者の語りにおける日本語運用を支援するために教師は何を教えたらいいたのだろうか。日本語の表現習得を促すことで学習者の語りをより分かりやすく、惹きつけられるものにするにはできないだろうか。こうした疑問を動機として、本研究では、中級日本語学習者の時間軸に沿った出来事についての語りの実態と問題点を日本語母語話者との比較によって明らかにすることを目的とする。

2 先行研究と研究課題

本稿では「語り」を、Labov (1972)^[註1]を参考に、過去の2つ以上の出来事について、時間軸に沿って語られる談話と定義する。さらに、本稿で扱う語りには、話者自身が体験したことはもちろんのこと、見たり聞いたりした内容も含まれるものとする。

日本語学習者の語りにおける言語表現の実態や問題点を指摘した先行研究ここでは二つに分けて概観する。まず一つめは日本語学習者の語りの分かりにくさに焦点を当て、話者の出来事の捉え方や談話の展開という観点から行われた研究、二つめは語りに現れる表現形式の機能について取り上げた研究である。

前者の場合、代表的な研究として渡邊 (1996)、南 (2005) が挙げられる。渡邊 (1996) は、話者が出来事をどのように捉えているかと、出来事の流れをどのようにつなげているかを知るために、視点表現と接続表現の分析を行った。その結果、学習者は母語話者と比べて、受け身・授受などの視点表現の使用が少なく、視点を統一しない傾向が見られ、これらが分かりにくさの一因となっていた。また、「て」形接続を多用する傾向があり、時間の流れや前件と後件の関係が分かりにくくなる事例が見られた。南 (2005) は語りを扱った研究が第二言語習得の分野ではあまり行われていないことを指摘しつつ、習熟度が異なる学習者の語りの分析を行った。その結果、習熟度が高い方が話の推移・展開のような背景情報をより多く含める他、修辭的技法を用いて生き生きと表現する傾向が見られた。これらの研究では、場面と場面の接続や語りの構造にかかわる文法的な表現の使用において、母語話者と学習者の傾向の違いや習熟度が低い学習者が抱える問題が明らかにされてきた。しかし、時間軸に沿った語りには様々な場面展開があることが想定されるものの、ある特定の場面描写に見られる言語特徴については十分明らかにされていない。とりわけ、語りにおいては新しい出来事の生起や意外な場面展開が話の流れの中で重要な意味を持ち、聞き手の興味をそそることが多い。こうした場面を学習者がいかに表しているのかは明らかになっていない。

語りに現れる表現形式の機能に着目した研究としては、加藤 (2003)、木田・

小玉 (2001) がある。加藤 (2003) は母語話者の体験談において、事実的な「たら」「そしたら」が果たす機能について分析している。その結果、接続辞「たら」「そしたら」が選択・使用される動機は、これらの表現が出来事的事実描写だけでなく、意外性という話者の評価も同時に表す機能を持つことによるものであると指摘している。特に、体験談のように時間軸に沿った語りにおいては、出来事的事実的描写だけでなく、その出来事に対する話者の感想や評価を織り込み、聞き手に提示する (加藤2003) とされる。語りにおける評価を重要視する研究に、Labov & Waletzky (1967)、Labov (1972) がある。これらの研究では語りを構成する6つの要素として、1) 概要、2) 設定・方向付け、3) 出来事の進行、4) 評価、5) 解決・結果、6) 結末を挙げているが、その中でも特に (描写する出来事に対する) 話し手や登場人物の感情・気持ち、話の意図を表す評価部分を非常に重要視している。また、Schiffirin (1981) は、話し手が語りの内容に対する態度や感情を聞き手に伝えることは、語りの内容について相対的に重要度の差異をつけることを意味するとしており、評価を表すことは聞き手の理解促進や興味を引き付けることにつながる。

こうした背景をふまえると、加藤 (2003) で取り上げられているような話者や登場人物の評価を表す表現形式の使用は、学習者の語りをより分かりやすく、魅力的なものにするために重要な項目である。しかしながら、木田・小玉 (2001) では、上級学習者を対象に、驚きや意外性といった話者や登場人物の評価を表す「たら」や擬音語・擬態語などの指導に焦点を当てた授業実践を行ったところ、授業前の学習者はこれらの表現をほとんど使用できないことが分かった。すなわち、学習者は表現形式を知っているにもかかわらず、実際に母語話者と同じような動機づけに基づいて語りにおける表現を選択・使用できていない可能性がある。

以上、日本語学習者の語りを対象にその問題点や習得実態を明らかにした研究を概観したが、残された課題として (1) 語りにおいて重要な意味を持つと思われる新しい出来事の生起、意外性のある場面について、学習者がどのように表しているのかは明らかになっていない、(2) 話者や登場人物の評価を表す表現形式の使用は、学習者の語りをより分かりやすく、魅力的なものにするために重要な項目であると考えられるが、学習者がそれを適切に選択・使用できているのかは十分検討されていない、という2点がある。

そこで、本研究では残された課題を解決すべく、以下を研究課題として設定し、日本語母語話者と学習者の語りが収録されたコーパスの分析を行う。

【研究課題】

中級レベルの日本語学習者は語りにおける新しい出来事の生起や意外性のある場面を、どのような表現を用いて表しているか。その表現は日本語母語話者とどう異なるか。また、学習者の母語により差が見られるか。

3 分析対象

分析対象としたのは、現在構築中の『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (I-JAS)』(大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所公開) である。I-JAS は12の異なる母語の教室環境日本語学習者、および日本国内の教室環境学習者、自然環境学習者、成人日本語母語話者による発話と作文のコーパスである (迫田他2016)。本稿では、「ピクニック」(5コマのストーリーテリング課題、図1参照)

の発話文字化資料のうち、第一次公開データに収録されている日本語母語話者、及び、3つの異なる言語を母語とする日本語学習者のデータを分析対象とした。具体的には、日本語母語話者 (以下、J) 15名と、日本語を外国語として学習している中国語母語話者 (CCM)、英語母語話者 (EAU)、韓国語母語話者 (KKD) の日本語学習者各15名、計60名の分析を行った。学習者はいずれもJ-CATとSPOTによるレベル判定が行われており、中級後半程度、日本語能力試験でN2程度であると位置づけられている^[註2]。課題に使用された5コマ (場面①~⑤) のイラストは、主人公である男女がサンドイッチを作ってピクニックに行くが、知らぬ間にバスケットに飛び込んだ飼い犬がサンドイッチを食べてしまうというものである。学習者はタス



図1 「ピクニック」(迫田他2016)

クを開始する前に、まず絵をよく見るよう指示され、ストーリーの内容確認をする時間が1分以内で設けられた。また、学習者は「ピクニック」というタイトルと「朝、ケンとマリはサンドイッチを作りました」に続けてストーリーを話すよう指示された。登場人物の名前(ケン、マリ、犬)や日本語能力試験の旧2級以上の名詞語彙(犬、地図、バスケット)には、日本語と英語の訳を付与し振り仮名がつけられていた。このタスクは、自身の経験ではなく、第三者に起こった出来事を外部からの視点として描写する課題であり、先行研究で述べた加藤(2003)、木田・小玉(2001)が用いた経験談の語りとは性質が異なる。しかし、本稿では対象者が使用する表現形式を比較することを目的とするため、語りの対象となる場面や出来事が統一できるストーリーテリング課題による産出を対象とする方が適当であると判断した。

分析対象は、物語の中で登場人物にとって新しい出来事が生起し、登場人物にとって意外性^[注3]があると考えられる場面④で用いられた表現形式である。場面④と⑤は時に連続した複文の中で語られることもあったが、その場合もバスケットから犬が飛び出し、ケンとマリが驚く場面の描写だと判断される部分のみを抽出し、場面⑤に描かれているようなサンドイッチなどを犬が全て食べてしまった、もしくは犬に食べられてしまったという言及は結果の数値には含んでいない。対象とする産出データの選定、分析作業は執筆者が行ったが、その全てにおいて日本語教育経験がある日本語母語話者1名によるチェックを受け、一致しない点については話し合いのもと解決した。

4 結果と考察

まず、JJJ、CCM、EAU、KKD、各15名全員が場面④について何らかの言及をしていた。以下に、CCMとEAUが産出した例を示す。

- (1) うーん彼は、彼らは着いた後、犬はバスケットボーバスケットに出してきました (CCM45)
- (2) 太郎(犬)は突然に一、えっとバスケットからえっと一、あわれ、あわれ、 (EAU05)

このように、場面④は主に、ケンがバスケットを開けると中から犬が飛び出した様子が複文、もしくは二文で語られている。

以下では、場面④の描写に用いられた表現で、特徴的であったものとして、「展開をつなぐ接続表現」、「動作主に言及する標識」、「出来事描写に伴う副詞」「登場人物の状態を表す表現」について順番に述べる。結果の数値と割合は紙幅の都合上、表中に示す。なお、全てのグループにおいて対象としたのは各15名であり、1話者が同一項目に含まれる表現を複数使用した例はなかった。つまり、各表現における出現数は同時にその項目を使用した人数を表す。合計数が15に満たない場合は該当する表現を産出しなかった話者がいたことを示す。

4.1 展開をつなぐ接続表現

各話者が「犬が飛び出す」という出来事と前件の展開をつなぐ際に使用した接続表現を表1と例3～5に示す。

表1 展開をつなぐ接続表現の出現数

話者	展開をつなぐ接続表現	計
JJJ	と6、とたん(に)3、すると2、ところ2、途中に1、間に1	15
CCM	時6、て3、たら2、後1、途中1	13
EAU	時(に)5、て4、たら2、ところ1、そこで1	13
KKD	時4、て3、たら3、けど2、で(文頭)1、でも1、それで1	15

まずJJJの使用を見ると、前件の事柄が契機となって後件の事柄を発見した(庵他2000)という関係を表す「すると」「と」「ところ」が10例、前件の事態が実現した瞬間に意外や驚きを伴う後件の出来事が起こる(日本語記述文法研究会2008)という展開を表す「とたん(に)」の使用が3例と、後件で生起する出来事の発見や意外性を表す接続表現の使用が大半を占める。

- (3) バスケットを開けました、すると中から犬が飛び出してきました (JJJ37)
- (4) バスケットを開けてみると、中から、犬が飛び出してきた、ケンとマリはとても驚きました (JJJ15)

一方、学習者が使用した接続表現は母語話者と異なる傾向が目立つ。まず、いずれの学習者も「時」「て」が上位を占めている。最も使用が多い「時」に関しては「主節の出来事が成立する時を同時点的に表すが、時間的前後関係から見ると主節の出来事が成立する時間は従属節の出来事が成立する時間の同時、直前、直後のいずれか」（日本語記述文法研究会2008: 171）であり、比較的汎用性が広いことから、学習者にとって使いやすい接続表現である可能性がある。また「て」に関しても、時間の流れに沿って順に生起する複数の事態をつなぐことができることから、学習者がよく使用する接続表現とされる。

(5) バasketを開ける時犬は、あ飛んで、出ました？ あ出ました (CCM10)

しかし、ここで注目すべきは、JJJによる「時」「て」の使用が1例も見られなかったことである。ただし、JJJの語り全体を見てみると次のような連続した出来事の単純な継起を表す場面②においての「て」の使用は見られた。

(6) ケンとマリは地図うらむ見ていろいろ考えてこ公園に行くことにしました (JJJ10)

つまり、JJJは時間軸に沿って起こる出来事の語りであっても、場面④のような出来事を描写する場合には「て」ではなく「と」や「すると」を使うことで、出来事の叙述とともに意外性を表していると言える。加藤 (2003) では、自らに起こった出来事の意外性を表しつつ出来事を叙述する場面で母語話者が「たら」「そしたら」を多く使用すると指摘しているが、本研究の課題は第三者に起こった出来事についての語りであったため、蓮沼 (1993) で述べられているように外部の視点からの語りとして「たら」より「と」が選択されたと考えられる。

ここで表1の結果に戻ると、学習者による「たら」の使用も各話者2～3名見られたことが分かる。渡邊 (1996) では学習時間が1～3年7か月 (1000時間程度) の中国語母語話者5名の語りを分析した結果、「て」の使用は顕著であるが、事実的用法の「たら」(蓮沼1993)の使用がほとんどなかったことを指摘している。本稿の対象者とレベルの差があまりないことを考えると、中級から上級にかけ

での段階は「たら」のような表現のバリエーションが増える過渡期である可能性がある。これについては今後習熟度別のデータを分析していく必要がある。

今回の分析では、そもそもの人数が少ないこともあり強い傾向ではないものの、実際の教室での指導において類似の語りの場面で「たら」を使用している学習者がいた場合には、体験談か外部の視点からの語りであるのかによって「と」と使い分けるよう示すことで、より適切な表現へと導くことができる。

接続表現の使用において、学習者の母語による大きな傾向の違いは見られなかったが、KKDに関しては「けど」「でも」という逆接表現を使用することにより、出来事の意外性を表していると考えられる例が3例見られた。こうした表現の使用は、単純に出来事を生起した順に羅列していくのではなく、重要な意味を持つ展開部分では聞き手にその意外性を伝えようという学習者の動機に基づくものであると推測される。

4.2 動作主に言及する標識

各話者が「犬が飛び出す」という出来事を描写する際に、動作主である犬に対して使用した標識を表2、図2に示す。

JJJとKKDは「が」の選択率が100%であった。野田 (1996) によると、物語に既に登場した対象については主題として「は」で言及されることが多いが、予想していなかった意外な出来事や行動を新しい出来事として述べる際には、非主題を表す「が」が用いられるという。すなわち、JJJの「が」の使用は意外な出来事の動作主を表していると言える。一方で、CCM、EAUは「が」の選択率が54%、53%とJJJやKKDと比較すると低く、学習者の母語によって大

表2 動作主に言及する標識の出現数

話者	は	が	他	計
JJJ	0 (0%)	14 (100%)	0 (0%)	14 (100%)
CCM	6 (46%)	7 (54%)	0 (0%)	13 (100%)
EAU	5 (33%)	8 (53%)	2 (13%)	15 (100%)
KKD	0 (0%)	14 (100%)	0 (0%)	14 (100%)

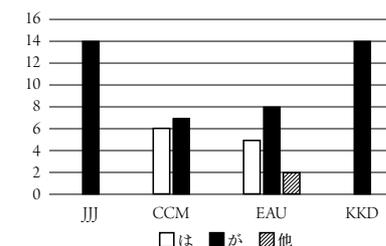


図2 標識の出現数 (回)

きな差が見られた。

KDDによる「が」の選択率がCCMやEAUと比べて高く、JJJと類似した傾向であったことについては、母語が影響した可能性がある。今回対象とした学習者の母語のうち、中国語と英語には日本語の「は」や「が」のような標識がないのに対し、韓国語は若干の違いはあるものの非常に類似した標識を有する。つまり、KKDは意外性がある展開場面での動作主の言及において、こうした類似性を持つ母語の標識の知識を利用し「が」を用いた可能性がある。これについては、実際に追調査として韓国語母語話者5名に図1の5枚のイラスト描写課題を実施したところ、全員が日本語の「が」と近い機能を持つ“가”で言及した。

(7) 피크닉 바구니안에서 흰둥이가 뛰어 나왔어요.
 ピクニック バスケットの中から シロ(犬)が 飛び出してきました

韓国語と英語を母語とする中・上級学習者が登場人物にどのような標識を使用するかを調べたNakahama (2011)、中浜 (2013) では、韓国語母語話者の「は」と「が」の使い分けの習得は英語母語話者より早く、母語の標識の類似性が影響している可能性を指摘している。Nakahama (2011)、中浜 (2013) では登場人物が初めて導入される場面か連続して言及される場面かによる標識の使い分けについて調査していたが、本研究の結果から新しい出来事の生起やその意外性を表す場面において登場人物に言及する際にも同様に母語の影響がある可能性が示された。

4.3 出来事描写に伴う副詞

各話者が「犬が飛び出す」という出来事を描写する際に、使用した副詞を表3と例8～10に示す。

表3 出来事描写に伴う副詞の出現数

話者	出来事描写に伴う副詞	計
JJJ	なんと2	2
CCM	突然2、一瞬で1、パッと1	4
EAU	突然(に)3、急に1、いきなり1、偶然(突然の誤用の可能性)1	6
KKD	急に1	1

JJJが使用した副詞は「なんと」の2例のみであった。

(8) バスケットを開けた途端に、なんと、犬が、飛び出してきました (JJJ50)

これは想定していたものと違う出来事が起こることを予期させる表現であり、話者や登場人物の意外な心情を表す表現だと言える。一方、学習者が使用した表現を見ると、CCMは「突然」「一瞬で」のように犬が飛び出す事象の生起にかかる時間が極めて短いことを表す表現(仁田2002)を用いている他、「パッと」を用いて犬が飛び出した時の様子を表現していた。EAUも同様に「突然」「急に」「いきなり」のように事象の生起にかかる時間の短さを表していた。KKDは1例のみの使用でCCMやEAUと比べ使用が少なかったが、他の学習者と同じく「急に」という時間を表す副詞を使用していた。

(9) ピクニックを、うん、ピクニックをする時、うん犬が突然、あんぼく、バスケットから、あ出了 (CCM16)

(10) で、そして、ケンとメーリさん、ケンとメリは、えっと公園に行って、あ、んー、食べる時に、えっと一犬、犬が、いきなり、出ました、ね (EAU23)

つまり、大変興味深いことに、場面④で使用された副詞は、母語話者が意外性を表す副詞、学習者が出来の生起時間の短さを表す副詞というように、表す意味がまったく異なることが分かった。こうした違いの背景に、まずJJJは「と」「すると」「ところ」「とたん」のように、前件がきっかけとなって、もしくは前件が実現した直後に後件が起こるという接続表現を用いていることから、既に前件と後件が生起する時間が短いことを想起させることができ、副詞で補う必要性が低かった可能性がある。それに対し、運用できる接続表現が乏しい学習者は、先行する出来事と後件の出来事発生との時間的距離の短さを表す副詞表現を使用することで表現不足を補おうとした可能性がある。

4.4 登場人物の状態を表す表現

最後に、各話者が「登場人物であるケンやマリの状態」を表す際に、使用した表現を表4と例11に示す。

表4 登場人物の状態を表す表現の出現数

話者	登場人物の状態を表す表現	計
JJJ	びっくり(です、しました) 4、驚きました3	7
CCM	びっくり(します、しました、した、させました) 6、驚いた1	7
EAU	びっくり(しました、して、した) 3	3
KKD	びっくり(しました、した) 6、びっくりした<N>1	7

JJJ、CCM、KKDは、話者全員に使用が見られたわけではないものの、びっくりしたり驚いたりした様子を表している。ここでEAUのみ驚きを表す表現の使用が少なかったことから、データを質的に分析してみた。すると、以下の例のように、ケンとマリの驚きには一切言及せずに、結果として場面⑤において昼食が食べられてしまって残念だった、悲しいという気持ちを表している例が15例中10例見られた。なお、同様の例はJJJには3例しか見られなかった。

- (11) お昼ご飯を食べる時、急に犬をバスケッ、バスケッ、から、飛んでしまいました、うーん食べ物を、見た時、犬にも食べられちゃっ、食べ、てしまいました、残念でした (EAU37)

日本語は出来事の過程を捉える志向にあり、英語は出来事の結果を分析する志向にある言語であることはよく言われるが、こうした事象の捉え方の違いによる表現形式への影響についても、今後詳しく検討していく必要がある。

5 本研究のまとめ

本研究は、新しい出来事の生起や意外性のある場面を第三者の視点から描写する場合、母語話者と中級学習者が使用する接続表現、標識、副詞の種類が異

なるだけでなく、学習者がどのような代用表現を用いて出来事表現しようとしているかについてや、母語が影響している可能性を示した。具体的には、(1)母語話者は接続表現を使用することで、出来事の叙述を第三者の立場から行うとともに、展開の意外性を表しているが、学習者の接続表現の使用は出来事の生起を順に叙述するに留まっていると言える。例えば、母語話者は意外な出来事が後件で生起することを表す「と」「すると」「とたん(に)」などを使用しているのに対し、学習者は複数の出来事が同時、継起として起こったことを叙述する「時」「て」を主に使用していた。(2)意外な出来事が生じた際の動作主への言及形式については、韓国語母語話者が日本語母語話者と同様に「が」を用いているのに対し、英語、中国語母語話者による「が」の使用はその半数程度であった。母語の標識の類似性が韓国語母語話者の「が」の使用に影響した可能性がある。(3)意外な出来事を表す副詞は出現数が少なかったが、母語話者は意外だという心情を表す「なんと」を用いているのに対し、学習者は「突然」「急に」などを用いて事象の生起にかかる時間の短さしか表せていなかった。(4)意外な出来事が生じた際の登場人物の状態を表す表現については、母語話者、学習者ともにびっくりしたことや驚いた様子を叙述し、大きな差は見られなかったが、英語母語話者の使用数が比較的少なかった。これについては、母語における事態の把握の仕方が影響している可能性を示唆した。

今回、母語話者が使用した表現形式については、中級学習者にとって既習の可能性が高い^[註4]ことから、学習者は知識としては持っているが、実際の文脈の中で効果的に使えない状態である可能性がある。砂川(2015)は、現状の日本語教育において学習者が日本語運用を行うために参照できる(文法)記述が不足していることを指摘しており、太田(2014)は運用につながる文脈(①誰が誰にどんなときになんのために使うか、②共起表現や文章展開、③他の類義表現ではなくなぜそれを使うのか)情報の記述が不足していると指摘している。本研究で対象とした学習者の語りからは、新しい出来事が生起する時間の短さを表す副詞の使用は見られたものの、母語話者のように出来事の評価を含む表現の使用は困難である様子が窺えた。このことから、中級以降の学習者には段階的に、語りにおいて重要となる話者や登場人物の心情、意外性を含みながら出来事を描写する表現についても指導していく必要がある。

特に、接続表現や標識、副詞などの表現は、日ごろは文単位か、長くても2文程度の文脈で導入・練習を行うことで既習項目とされることが多い。しかし、中級以上の学習者がこうした表現を運用することに鑑みれば、教師はある程度長さのある文脈を用いたり、日常で起こり得る語りの場面を想定したりしながら提示する工夫が必要である。

なお、本稿において母語話者が「評価」を表すために使用した表現については、あくまで時系列に沿った出来事を第三者の目線から描写するというストーリーテリング課題において使用されたものであり、その他の「語り」の場面に応用するには、文体差等に配慮する必要がある。中俣 (2014) では、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を分析したところ、発見を表す「と」の多くが小説に表れたことを指摘している。「すると」のような表現も、日常の話し言葉より小説や物語などで頻繁に使用されることが想像できる。学習者が文体に応じた表現を習得するには時間がかかると考えられるが、こうした点についても今後研究が蓄積されることで、砂川 (2015) が目指す学習者が日本語運用を行うために参照できる記述の提供に貢献できると考える。 <首都大学東京>

謝辞

本稿は、2016年度日本語教育学会秋季大会（於愛媛ひめぎんホール）、及び、学習者コーパス研究会（於国立国語研究所）での発表内容に加筆・修正を加えたものです。論文化に向けてご助言をくださった砂川有里子先生をはじめ、貴重なご意見をくださった皆様に厚くお礼申し上げます。

また本稿は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構が所有するデータ集『多言語母語の日本語学習者横断コーパス (International Corpus of Japanese As a Second Language、通称: I-JAS) のオンライン公開版による成果の一部です。代表の迫田久美子先生をはじめ、関係者の皆さまには、深く感謝し、心よりお礼申し上げます。

注

[注1] …… Labov (1972) はこれを「ナラティブ (Narrative)」と呼んでいる。

[注2] …… J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) は日本語能力自動判定テストで、聴解、語彙、文法、読解の4セクションから日本語能力を測定するものである。SPOT (Simple Performance-Oriented Test) はTTBJ (Tsukuba Test-Battery of

Japanese) の1つで、言語知識と言語運用の両面から日本語能力を測定するものである (迫田他2016)。

[注3] …… 本研究では「意外性」を「考えていたことと非常に違っていること、またはそのさま」と定義する。

[注4] …… 日本語能力試験の出題語彙レベル、『みんなの日本語』初級Ⅰ、初級Ⅱ、中級Ⅰ、中級Ⅱの出題語から推測。ただし、「なんと」は未習の可能性はある。

参考文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 太田陽子 (2014) 『文脈をえがく一運用力につながる文法記述の理念と方法』コト出版
- 加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験的な語りについて—談話に表れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機」『世界の日本語教育』13, pp.57-74. 国際交流基金
- 木田真理・小玉安恵 (2001) 「上級日本語学習者の口頭ナラティブ能力の分析—雑談の場での経験談の談話指導に向けて」『日本語国際センター紀要』11, pp.31-49. 国際交流基金日本語国際センター
- 迫田久美子・小西門・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子 (2016) 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語プロジェクトレビュー』6(3), pp.93-110. 国立国語研究所
- 砂川有里子 (2015) 「日本語の教育と研究の間—来し方と行く末」阿部二郎・庵功雄・佐藤琢三 (編) 『文法談話研究と日本語教育の接点』pp.319-348. くろしお出版
- 中浜優子 (2013) 「タスクの複雑さと言語運用 (正確さ、複雑さ、談話の視点設定) との関連性」『第二言語としての日本語の習得研究』16, pp.146-163. 第二言語習得研究会
- 中俣尚己 (2014) 『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
- 仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2008) 『現代日本語文法6』くろしお出版
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志 (編) 『日本語の条件表現』pp.73-97. くろしお出版
- 南雅彦 (2005) 「日本語学習者のナラティブ—ラヴォビアン・アプローチ」『言語文化と日本語教育VI』pp.137-150. くろしお出版
- 渡邊亜子 (1996) 『中上級日本語学習者の談話展開』くろしお出版
- Labov, W. & Waletzky, J. (1967) Narrative Analysis: Oral versions of personal experience. In J. Helm (Ed.) *Essays on the Visual and Verbal Arts* (pp.12-44). Seattle: University of Washington Press.
- Labov, W. (1972) *The Transformation of Experience in Narrative Syntax Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Nakahama, Y. (2011) *Referent markings in L2 narratives: Effects of task complexity, learners' L1 and proficiency level*. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.
- Schiffrin, D. (1981) The Variation in Narrative. *Language*, 57, pp.281-303.

参考資料

『みんなの日本語』初級Ⅰ 第2版本冊 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語』初級Ⅱ 第2版本冊 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語』中級Ⅰ 本冊 スリーエーネットワーク

『みんなの日本語』中級Ⅱ 本冊 スリーエーネットワーク
